

昭和期における横須賀市長坂の農耕について —高橋豊家氏の語りから—

原田 保子\* 瀬川 渉\*\*

The Showa period farming practices in Nagasaka Yokosuka,  
based on the narrative of Mr. Toyoie Takahashi

HARADA Yasuko SEGAWA Wataru

Discusses the farming practices in Nagasaka Yokosuka during the Showa period, based on the narrative of Mr. Toyoie Takahashi (born in 1925). In Nagasaka Yokosuka was the largest paddy field area in the vicinity. Several weirs were used for cultivation, and the initiation of The Inari religious association served as a key indicator for the start date of paddy field preparation. This article illustrates the weirs and cultivated fields in Nagasaka Yokosuka, and introduces the process of paddy cultivation.

はじめに

小稿では、昭和期における横須賀市長坂（以下、長坂）の農耕について、高橋豊家氏<sup>とよいえ</sup>（大正14年生まれ）の語りをもとに述べる。高橋豊家氏の屋号は佐左衛門で、1700年代から長坂の堀越地区で続いてきた家であり、豊家氏で10代目である。小稿のもととなった聞き取り調査は、2009年4月20日、辻井善彌、住岡和枝、原田保子(高橋豊家長女)で行った。小稿はそれを原田と瀬川でまとめたものである。

---

\* おおくすエコミュージアムの会

\*\* 横須賀市自然・人文博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka, 238-0016 Japan

原稿受付 2024年1月10日 横須賀市博物館業績 第785号

Keyword: farming practices The Showa period Nagasaka Yokosuka

キーワード: 農耕 昭和期 横須賀市長坂

## 戦前の長坂の農耕

長坂は大楠地域で一番水田が多かった。芦名・久留和・三崎の人でも長坂に水田を持っている人があった。清水耕地(谷戸地区)、荻野耕地、鹿島耕地、前耕地、堀越耕地、やぐらの前耕地などがまとまった水田地帯であった。耕地には収穫量をもとに等級がつけられていたが、堀越耕地は5等で、他は6等～等外であった。

水田用水は、川止め式の堰と人工池の堰の水を利用した。川止めの堰は岩川上流の芝堰と下流の岩川の堰、荻野川上流の大堰と下流の釜田の堰の4か所。人工池の堰は昭和6年浚渫の堀越堰、昭和8～9年浚渫の沢山堰と虫山堰の3か所であり<sup>1)</sup>、沢山堰には水神を祀る石碑がある(写真1・2参照)。堰はそれぞれ水利組合が管理していて、世話人会で水を出す日や水量などが決められた(文末地図参照<sup>2)</sup>)。



【写真1】沢山堰



【写真2】沢山堰水神石碑

戦後の農地解放で、2町歩以上の田畑を持つことができなくなったが、長坂でそれにかかった家は2軒だけであった。自作していないと、8反歩しかもてなかったが、それにかかったのは1軒だけであった。

長坂の農地は、ハネッコと呼ばれる粘土質の所が多く、畑は「フンゴミ」と言ってフズキグワを使って、3冊ごとに笹の葉を入れて土質改善を図ったりしていた。長井あたりでは、1日1反(=300坪)ウナえない<sup>3)</sup>と一人前とは見なされないとされていたが、長坂では、1日2畝(畝=1反の10分の1)ウナえれば1人前とされていた。それほどに、ハネッコの土質での耕作は重労働であった。

戦前の長坂の主な畑作物は、大麦、小麦、ハダカムギ、大豆、小豆、サツマイモ、大根、里芋、人参、ゴボウ、キャベツ、キュウリ、玉ねぎなどで、大豆と麦は輪作していた。

戦時中は、大豆、麦、サツマイモの供出(決められた量を一定価格で政府に売渡す)があった。自家用として、蕎麦も作っていた。大昔は綿も自家用に作っていたと聞いている。

肥料は、昔は堆肥・土肥・下肥など全て有機肥料であった。化学肥料が使われるようになったのは昭和 15 年ごろで、戦時中は反別<sup>たんべつ</sup>に応じて「硫安」、「過リン酸」などの配給があった。

## 昔の米づくりの作業

### ◎稲荷講が 1 年の米づくりの始まり

水田作業は、「稲荷講」の日から始まった。「稲荷講」は農耕の神様でもある稲荷様のお祭りで、毎年 2 月の初午の日（または 2 月 11 日）に行われる。稲荷講は、農耕に関しては特別な日で、昔は農地の貸借もこの日を境としていた。

「稲荷講前は、どんなに温かくても、田は起こさない。稲荷講の日は寒ければ手ぬぐいを 2 枚被って田に入れ。」などという教えもあり、初午の日に田起こしを始めるのが習いであった。この時期は堰の水は用いず、天水が頼りであった。

### ◎田起こしの道具

畑で使う犁は「フズキグワ」で、田で使う犁は「オンガン」と「マンガン」であった。「オンガン」は、田を起こす道具であり、「マンガン」は起こした後にならす道具であった。

耕運機のない時代は、各家で飼っている役牛が田起こしの重要な動力源であった。牛に「オンガン」を引かせ、一人が牛の鼻取り、もう一人がオンガンを押さえる人、二人一組で田起こしをする。中には、この仕事を一人でやる器用な人もあった。長坂では、田起こしを馬でやる人はいなかった。牛の方が使いやすい。横須賀市自然・人文博物館では、長坂で使用されていた「オンガン」と「マンガン」は所蔵していないが、野比で使用されていたものは所蔵している（写真 3・4 参照）。



【写真 3】 オンガン



【写真 4】 マンガン

## ◎米づくりの手順

### 《1. 田起こし》

最初に田を起こす。「ハンダイオコシ」(ハンデオコシ)という。使う道具はオンガンと鍬(くわ)。田起こしの後は、耕地を作るために水を張った田の土を手鍬で細かく耕す「シロ」という作業が行われ、その後田植えの直前になると、土を丁寧に均す「カイタジロ」(ケータジロ)という作業が行われた。この時に使う道具はマンガンだった。

### 《2. 肥料》

ハンダイオコシの時に刈った草は、そのまま田に入れておく。キャベツの葉も田に捨てる。鹿島の人たちは、モク(海藻)も使っていた。そのために漁業権を持っていた人もいた。カイタジロまでやってから土肥(ドイ)をまく。土肥とは、堆肥。牛舎の敷き藁と牛の糞尿を混ぜて発酵させて作った肥料である。

### 《3. 苗間(ナエマ)作りと種まき》

まず苗間を作る。苗間は少し高くして短冊形の苗床を作り、水をためておく必要がある。降雨の少ない時には苗代用に限定して堰の水を出した。これが、堰水の使い始めであった。

種籾は、俵やカマス(藁製品)に入れ棚井戸に浸しておいてから蒔いた。種まきは5月5日の端午の節句の日ごろに行った。種まき後は毎朝、苗間のミノグチ(水口)を開けて水を出し、昼間は乾かして、夕方4時過ぎ頃の温かいうちに水入れを行い、水を張った。昔はハウスの苗間などなかった。鳥の被害が出たのは戦後になってからのことだった。種まきが終わると一安心で、「種まき正月」といった。

水に浸した種籾が残ると、よく乾燥させてから精米所に持込み搗いてもらった。それを「ヤコメ」と呼び、いりがら(大型で浅い鉄鍋)で炒って、その後蒸したり鍋で煮たりして3時のおやつに食べた。文久2年生まれの祖母の作ってくれたヤコメはおいしかった。小豆入りで、砂糖を少し加えて煮たものだった。

### 《4. 「カイタジロ」(ケータジロ)》

田植え前の整地を「カイタジロ」(ケータジロ)という。牛にマンガンを引かせて行う。その後更に鍬で均す人もいた。カイタジロの行われる6月20日頃から、田植えが終わるまでの間、必要に応じて堰水が放水された。

シロの済んだ水田には水が張られ、水漏れがないように適宜水田の巡回をしていた。この作業は、「田廻り」と呼んで、時には子どもも手伝ったりした。ザリガニが穴を開けて、水田の水が突然無くなってしまうことがあったりするので、田廻りは欠かせない作

業だった。日中、田のクロ全体が赤黒くなるくらいびっしりとザリガニが並んでいるのを見かけることもよくあった。

尚、ザリガニが長坂の田んぼに出現したのは昭和 10 年に近いころだったと記憶している。当時は、ザリガニという名前は知られていなくて、「エビ」と呼んでいた。

#### 《 5. 田植え 》

田植えは 6 月 25 日ごろから 7 月 8 日の浅間様の祭りまでの間に行った。1・5・28 日はおめでたい日とされていて、田植えは 6 月 28 日から始めることが多かった。28 日にできない場合には、少しだけ植えることもあった。

7 月 8 日は浅間様の祭りであったが、浅間講の仲間がこの日までに田植えが終わらない家があると手伝いに行った。半数以上の家が終わらないようなら、浅間様のお祭りを 10 日か 11 日に延期した。

当時の田植えは手植えなので、人手が必要だった。我が家では、人を頼んで田を植えた。秋谷・佐島の漁師の奥さん方が来てくれた。昼食には今の定食並みの食事を提供し、おやつは 10 時に菓子、3 時におにぎりを出した。日当は、1 日当たり白米 1 升であったが、食糧難の時代であったので近所から「多すぎる」との苦情もあった。

田植えの終わりは「シメーダ」と言って、終了後の日の佳い時を選んで、赤飯を蒸かし、余った苗の 2、3 本を洗って結んだものを添えて田植えをしてくれた人たちに配った。神棚と稲荷様にもお供えをした。

#### 《 6. 田の草取り 》

夏の暑い時期、田んぼに生えた草を取るのは重労働である。しかし、稲の成長を妨げる雑草の除去は欠かすことのできない作業であった。稲の間を歩いて、雑草を一本一本手作業で抜いていった。夏の草は成長が早いので時期を逃すと抜くのが大変になるので、作業は適当な時期を見計らって親戚の援けを借り、集中して行った。

#### 《 7. 稲刈り 》

毎年 10 月 5 日頃に政府売り渡し米のための作柄検査が実施され、その後、稲刈りが行なわれた。

昔は刈った稲は大束で田に置き、稲こきの 1 日前に裏返しに行った。後に、杉丸太を組んでハサガケを行うようになった。昭和 38 年、西武が現在の長坂 5 丁目一帯の山を買収した頃から、農耕の機械化が進み、乾燥機も使用されるようになった。しかし、ハサガケの方が政府売り渡し米の等級がよかった。

## 《 8. 脱穀・粃摺り・俵詰め 》

脱穀は、戦前は足踏み式の脱穀機を用いるのが一般的であった。長坂では、一軒だけ「焼玉エンジン」の機械を用いる家があった。脱穀した粃は、干し物場(南傾斜の畑や母屋の庭先など日当たりの良い所)に干す。干した粃は夕方家の土間に運んで、その日のうちに粃摺りから選別まで行った。

手順は、まず唐臼で粃摺り、次に唐箕で玄米に混ざっている粃殻や塵を吹き飛ばし、更に通し(万石・千石)で選別し、混じり物や砕け米などを除く。選別した玄米は、俵に詰め一定量は政府売り渡し米、残りは自家用とした。

高度経済成長、昭和43年制定の新都市計画法による市街化区域・市街化調整区域の区分の創設、昭和44年に始まった減反政策などの影響もあって、昭和40年代以降長坂の米づくり農家は減少の一途をたどった。豊家氏の日記によると、「我が家の米づくりは昭和62年が最後であった。」とのことである。

## 堀越地区の米づくりと堰の水

田起こしは、初午の日に始めるのが習いであったが、この時期は堰の水は用いず天水が頼りであった。

堰の水が最初に使われるのは、苗床作りの時期であった。種まきの目標日は5月5日、端午の節句の日である。この日に向けて、苗床作りが行われるのだが、降雨の少ない時には、苗代用に限定して、堰水を出した。堰水を出すにあたっては、堰の世話人会(水利組合の役員会)が開かれ、話し合いで水を出す日時や水量を決めた。堰土手に囲まれた堰には、「ヒゴ」と呼ばれる放水口が数段あって、上から順に必要なところまで開けて放水した。

次に堰水が放水されるのは、田植えの時期である。田植えは、6月25日頃から開始し、7月8日の浅間神社のお祭り「浅間様」を最終日とするのが決まりだった。近所で手伝い合いなどして、毎年この日までにはどこの家でも田植えを済ませた。田植えに先立ち、「カイトジロ」と呼ばれる代かきを行い、田植えのできる水田を作っていく必要がある。「カイトジロ」は古くは役牛に「マンガン」と呼ばれる犁をつけて行われた。この作業が行われる6月20日頃から、田植えの終わる7月8日までの間に堰水が放水される。堰水の有効利用を念頭に、いつどれだけの水を出すか、堰の世話人会で慎重に相談して、放水した。

降雨が順調な場合は、田植え時期を過ぎても堰水が残るので、7月8日以降も適宜放水をした。植えたばかりの苗にとって水が必要なことはもちろんだが、根付いてからも特に8月半ば過ぎの稲の花が咲く頃の水は「ハナカケミズ」と呼ばれ、豊かな実りのた

めに貴重であった。堰水の放水は、「ヒゴ番」と呼ばれる堰の番をする担当者がいて、その人が、ヒゴを開けて行った。一番下の放水口である「ドロビン」まであける年もあった。「ドロビン」を開けた後の堰の底には「ヌマ」と呼ばれる流土が残り、ウナギやドジョウ、コイ、フナなどもいた。

ドロビンまで開けた後は、堰の水利組合の人たちの手で「かいぼり」が行われた。子どもたちも手伝った。魚類を大きな桶に移し、土は堰に隣接した「ヌマ揚げ場」と呼ばれる空き地にすくい上げられた。魚類は堰に水が溜まるまでの2、3日の間、桶の中に保護されていたのだが、一部はカイボリ作業の慰労会の酒の肴となったり、家々の食卓に上がったり、池に放されたりもした。

水量が豊富な年には、堰の水が残る。その年には貴重な水を不必要に放流することなく、カイボリは行われなかった。しかし、少なくとも3年に一度くらいは水不足で、ドロビンまで開ける必要があり、カイボリが行われた。それによって、堰は水量も水質も保たれていた。

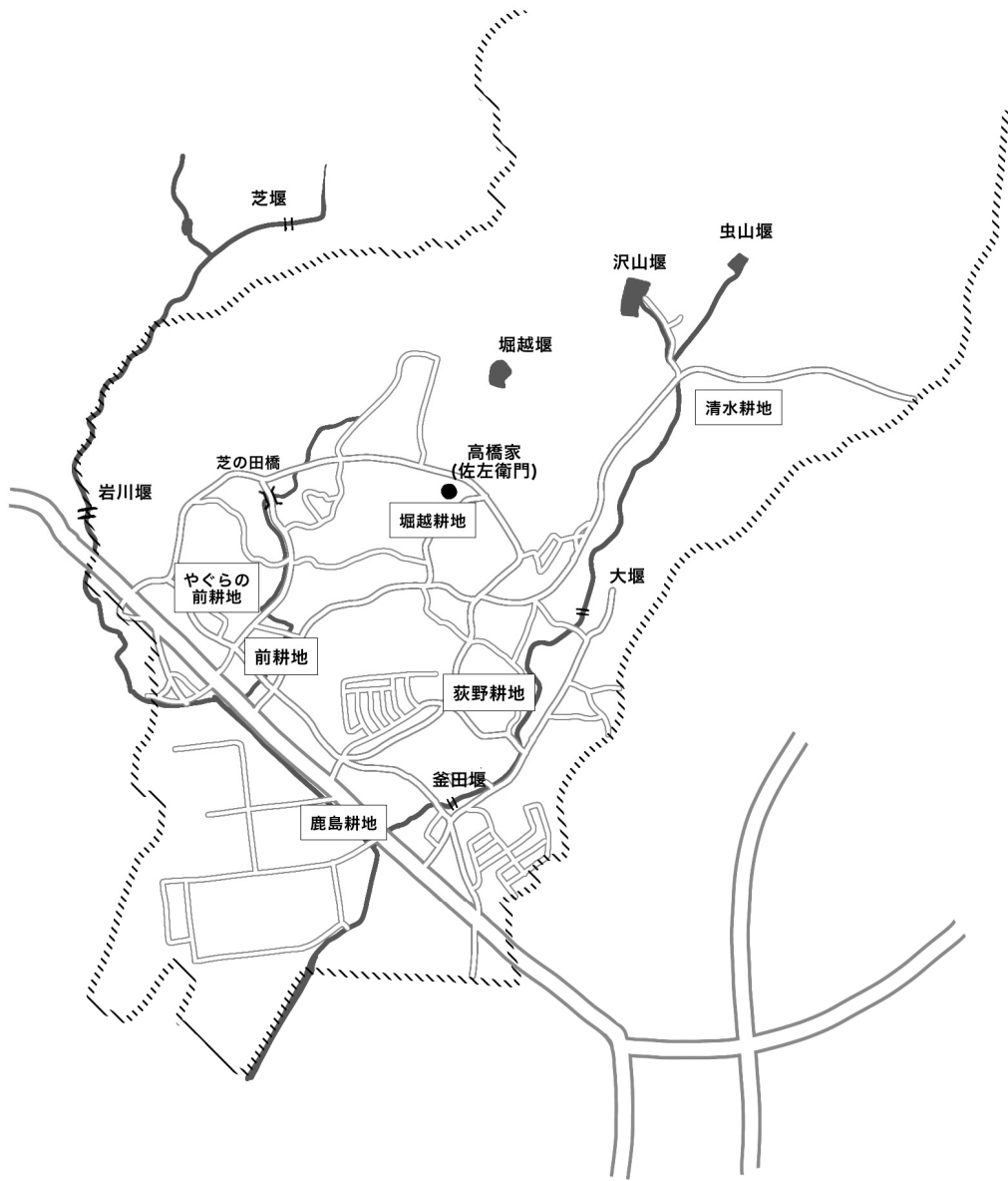
---

<sup>1</sup> 長坂では、堀越池、沢山池、虫山池と呼ぶこともある。

<sup>2</sup> 当時の地図ではなく、現在の地図を用いて作成した。

<sup>3</sup> 長坂では、田は「おこす」、畑は「うなう」と言う。

漢字表記の文書は見当たらないため、口頭でのみ使用する言葉と思われる。



地図 戦前の長坂の主な耕地と堰